

百人一首を書きましよう。

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば

忍ぶることの弱りもぞする

式子内親王

見せばやな雄島の海人の袖だにも

濡れにぞ濡れし色は変はらず

殷富門院大輔

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに

衣かたしきひとりかも寝む

後京極摂政前太政大臣

わが袖は潮干に見えぬ沖の石の

人こそ知らねかわく間もなし

二条院讃岐

【現代語訳】

私の命よ、絶えるならばいつそ絶えてしまってくれ。このまま生き長らえていると、耐え忍ぶ力が弱って人に知られてしまうから。

【現代語訳】

貴方にお見せしたいものですね、この血の涙のために色が変わった私の袖を。あの雄島の漁夫の袖でさえ、ひどくぬれはしましたが色は変わりませんでした。

【現代語訳】

こおろぎの鳴く霜夜の寒い夜、閨ねやのむしろに衣の片袖を敷いて、私は一人寂しく寝るのでしょうか。

【現代語訳】

私の袖は引き潮の時にも見えない沖の石のように、人は知らないけれどもいつも涙にぬれて、乾くひまもないのでございませう。